

# 秋分儀式

I O S 儀式魔術文書 AE94



THE OFFICIAL ORGAN

OF

I O S

PUBLICATION IN CLASS D

IMPRIMATUR : M FRATER I O S

THE AUTUMNAL EQUINOX CEREMONY FOR GROUP WORKING

I O S RITUAL MAGIC WORKING

# 目 次

- 第 1 章 解 説
  - 1 司官の配置
  - 2 儀式場の準備
  
- 第 2 章 開 式
  - L B R P / L B R H
  - 浄化 / 聖別
  - 四門の開放
  - 竜の周行
  - 宇宙の主の讃歌
  
- 第 3 章 秋分祝祭
  - 諸神の召喚
  - 神問い
  - 聖 餐
  - 宇宙の主の讃歌
  
- 第 4 章 閉 式
  - 浄化 / 聖別
  - 諸神への賛辞
  - 竜の逆周行
  - 宇宙の主の讃歌
  - 四門の閉鎖
  - L B R P / L B R H

All rights reserved. Copyright C 1994 by I O S

No part of this text may be reproduced or transmitted in any form or by any means, electronic, mechanical or spiritual, including photocopying, recording, psychometry or by any information storage and retrieval system, without permission in writing from the Order.

## 第1章 解 説

本儀式は、小規模な団内グループ(ロッジ単位程度)が比較的簡易な準備で行えることを前提に作成した。従って、《黄金の夜明け》団などで執拗なまでに追求された儀式のシンメトリーや細部の精密さに欠ける部分があるかもしれない。しかし、本儀式においては、豊潤な虚飾より実践的簡潔さを、正確で冗長な記述より、瞬間の真実と実効性を追求した。

《春秋分点》は、「均衡と調和」を表象する宇宙的な時刻である。年に2回の分点において、太陽の運行または振動と地上の四大元素が融合する。本儀式は秋分点の前後48時間以内に実施すること。本儀式では、立体天球の北極を取り巻く《大いなる竜》の力を召喚する。従って儀式の最初と最後にハイエロファントは、自己の責任で小五芒星及び小六芒星の追儼儀式を行わねばならない。竜を伴う関係上、五芒星儀礼は《エジプト式文》を行う必要がある。六芒星儀礼は『スター・サファイヤ』のラテン語版を記述した。四方位を竜の開門で開き、「生まれなき者」の儀式により《三重に偉大なる者》《驚の神》を召喚する。

### 1 司官の配置

本儀式に必要な最低の人数は4人である。(ハイエロファントがヘゲモンを兼ね、儀典司官がいらない場合。)通常は8名の司官を選定する。司官以外の参加者は、何人でも可能であるが、グループの大きさに応じて適当な場所を選ぶ必要がある。

司官、参加者ともに可能ならば、法衣を纏う。通常は、位階の指定色、《黄金の夜明け》では第1団は黒、第2団は白であるが、特殊な神殿の場合はこの限りではない。

司官8名の体現する象徴、神、魔法武器、役割などは以下のとおりである。

《ハイエロファント = 霊 = ラー・ホール・クイト神》  
魔術剣と鈴を携え、神殿を初期化し、儀式全体を執行する。

《ヘゲモン = 風 = ネフティス女神》  
短剣を携え、東の場を設定し、イシス神に神問いを行う。

《ダドウコス = 火 = セト・テュフォーン神》  
杖を携え、神殿を火で聖別し、南の場を設定する。

《ハイエレリア = 水 = イシス女神》  
杯を携え、神殿を水で浄化し、西の場を設定し、イシス神の媒体となる。

《ストリストリア = 地 = オシリス神》  
アंकを携え、北の場を設定する。

《儀典司官 = トート神》  
儀式文書を携え、儀式の節目に発言し、不測の事態に当たっては司官及び参加者を誘導する。その役目は儀典官(Protocolor)、後見人(Prompter)、先唱者(Precentor)である。

《門番 = アヌビス神》  
黒杖を携え、神殿の門を守る。境界の右の守護者

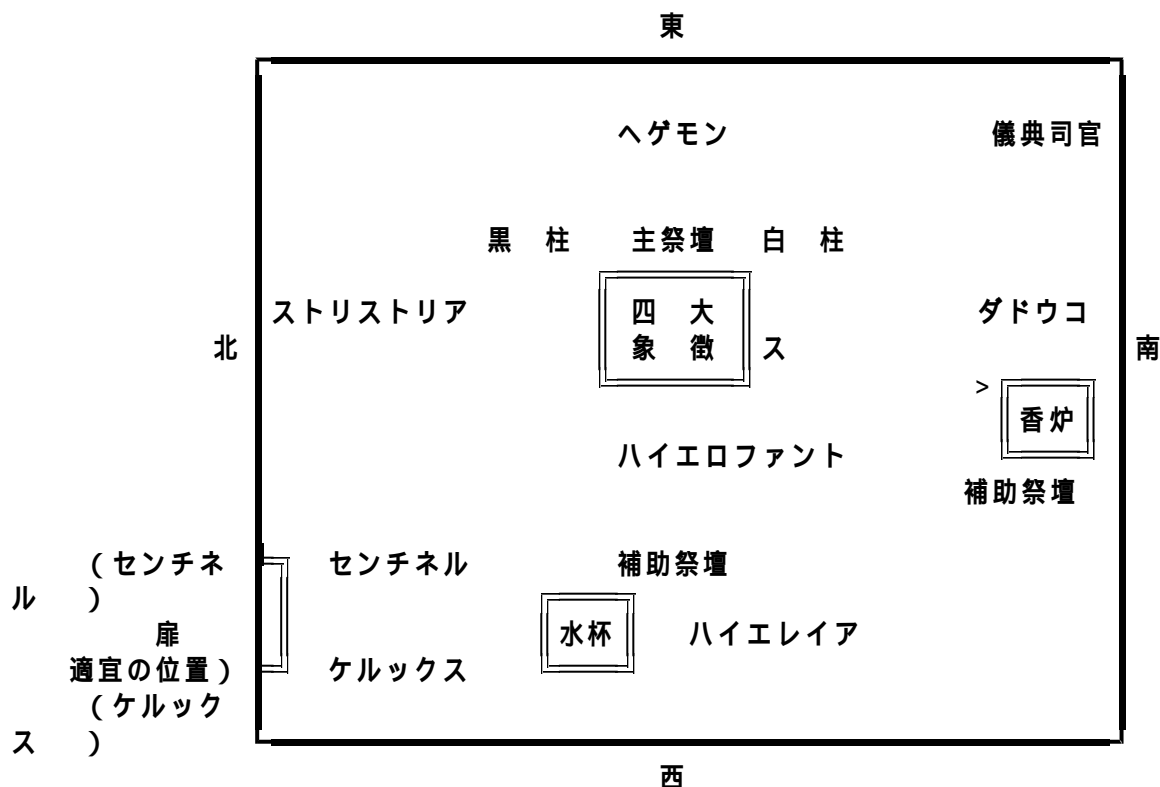
《警衛 = セベク神》  
剣または槍を携え、神殿の門を通過する者を脅かす。境界の左の守護者

## 2 儀式場の準備

完全な形の神殿を準備することは不可能である。地上の神殿は、アストラル神殿を誘引するための道具立てなので、要点を押さえる形で器材を配置する。次に述べるのは、魔術の神殿において通常配置される主要な器材であるが、総てを揃える必要はない。グループで準備できる範囲で、儀式の場所に適合した器材を準備すれば良い。それが無理な場合は、ただの部屋を何の粉飾もせずを用いる場合もある。

神殿は薄暗くしておく。儀典司官は書物を読むために、必要な携帯灯火を用意しておく。

### 〈神殿の配置〉



### 〈祭壇〉

理想的には、二重立法祭壇を準備する。《黄金の夜明け》式の黒、セフィロト配色、その他の神殿固有の色調等を用いる。普通の机を用いる場合は祭壇覆いをかけて代用する。祭壇は部屋の中央に据える。本儀式においては、南と西に補助祭壇を設けて、神殿を清める香炉に水杯（ゴブレット）を置く。香炉は、ハイエロファントがLBRP及びLBRHを開始する以前に点火しておくが、儀式の最中に燃え尽きてもそのままが良い。水杯には十分な塩水を入れておく。

### 〈柱〉

ヤキンとボアズの二柱を準備する。できない場合は、想像力で補う。神殿の正面を東とし、東の壁のさらに彼方に、右に白く輝く象牙の柱、左に黒光りする黒檀の柱を視覚化する。

### 〈椅子〉

四方位の壁の中央に椅子を置き、四方司官の座とする。ハイエロファントと儀典官には椅子はない。参加者の椅子は適宜配置する。部屋の構造が四方位と対応していないときは、儀式的な東方の壁を最初に定めて、そこから東西南北を規定する。四角形ではない部屋を用いる場合は、その構造に応じて配置する。

**《四大旗》**

該当する方位の壁に下げる。『エゼキエル書』に現れるケルビムを表象する旗、絵画、彫像、或いは記号を表示すれば良い。準備できなかった場合は、参加者全員が鮮やかに視覚化できるように言葉で誘導する。

**《小物》**

四大を象徴する魔術用具、東 - 剣、南 - 杖、西 - 杯、北 - 塩の皿、等に加え、鈴、キャンドル、香炉や各種魔術武器等を可能な限り準備する。これも代用品を探すことは可能である。

## 第2章 開式

参加者は別室で法衣を着用する。(状況により平服で行う場合は、なるべく黒または白系統の模様のないシンプルな服装を用意する。長袖、長パンツ、ロングスカート等のなるべく肉体を覆い隠すものが良い。しかし、奇をてらってはいけない。)

法衣の着用が終了したら、沈黙し儀式の背後にある意味を黙想しつつ待つ。

ハイエロファント(Ht)が最初に入場し、室内で小五芒星追儼儀礼(エジプト式文)及び小六芒星追儼儀礼を行う。

次のごとく《竜の十字》を切る。両腕を上げ掌を上に向け、頭は上空を仰いで言う。

「A B R A K A D B R A (アブラ・ハダブラ)」

両腕を降ろし掌を下に向け、背筋を伸ばしたまま、頭を垂れて言う。

「T h L I (テリ)」

頭を正面に向け、左手で右肩に触れて言う。

「V B R C h (ヴェ・バレアク)」

左手をそのまま、右手で左肩に触れて言う。

「V O Q L Q L V N (ヴェ・アカルケロン)」

両手を肩から胸に滑り降ろし、両腕を十字に組み言う。

「O L B L I M H (アル・ベリマー)」

東に行き、地の追儼の五芒星を描き、中心を指し、次を唱える。

「H R V - R A - H A (ヘル・ラ・ハ)」

南に行き、五芒星を描き、中心を指し、次を唱える。

「A P V - P R S h (アポ・フラス)」

西に行き、五芒星を描き、中心を指し、次を唱える。

「A S T h - R N N V T h (アスト・レンヌース)」

北に行き、五芒星を描き、中心を指し、次を唱える。

「A S R - V N - N P R (アサル・ウン・ネフェル)」

東を通過し、中央に戻る。

両腕を広げ、次を言う。

「我が前に、H R V - M A K H I S (ヘル・マクス)

我が後ろに、H R V - A M O V N (ヘル・アモウン)

我が右手に、H R V - M H N T V (ヘル・メントゥ)

我が左手に、H R V - K H O N S V (ヘル・コンスー)」

「A - H - A (アスト・ヘル・アサル)」

「我がうちに、静寂と力の星たる五芒の線が燃え、

柱のなかに、真夜中の太陽たる六芒の光が輝く。」

再び、《竜の十字》を切る。

中央でL V Xのサインを行う。

東に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「P A T E R E T M A T E R U N U S D E U S A R A R I T A 」

南に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「M A T E R E T F I L I U S U N U S D E U S A R A R I T A 」

西に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「F I L I U S E T F I L I A U N U S D E U S A R A R I T A 」

北に行き土星の追儼のユニカーサル・ヘキサグラムを描く。

「F I L I A E T P A T E R U N U S D E U S A R A R I T A 」

中央に戻り、薔薇十字を描く。

「A R A R I T A A R A R I T A A R A R I T A 」

トライデントのサイン、引き続き両手を王冠に添え、大地に落とす。

「OMINA IN DUOS DUO IN UNUM : UNUS IN NIHIL :  
HAEC NEC QUATUOR NEC OMNIA NEC DUO NEC UNUS NEC NIHIL SUNT.」  
「GLORIA PATRI ET MATRI ET FILIO ET FILIAE ET SPIRITUI SANCTO EXTERNO ET  
SPIRITUI SANCTO INTERNO UT ERAT EST ERIT IN SAECULA SAECULORUM  
SEX IN UNO PER NOMEN SEPTEM IN UNO ARARITA.」

L V Xサインを行う。

杖をもつケルックス ( K x ) と剣または槍をもつセンチネル ( S e ) は、扉の外側で左右に別れて立っている。Mの鈴の合図の鈴 ( 銅鑼 ) で入室を開始する。最初に守護者が入室して右側に立ち、続いてセンチネルが入室して左側に立つ。他の司官及び参加者は、この二人の間をくぐり、儀典司官 ( P t )、ヘゲモン ( H g )、ダドウコス ( S e )、ハイエレイア ( H r )、ストリストリア ( S t )、その他の参加者 ( 東南西北側 ) の順で入室する。

それぞれは入室する際にセンチネルに剣を突きつけられ、ケルックスの耳にロッジのパスワードを囁かねばならない。ケルックスは正しいパスワードを聞いたなら頷いて、先に行かせる。センチネルは参加者の人数を確認する。

H t : 「ケルックスよ、全ての者が正しいパスワードで応じたか。」

K x : 「全てパスワードを告げし者なり。神殿の首領よ。」

H t : 「センチネルよ、参集すべき者は集まりしか。」

S e : 「呼集されし者すべて集いたり。神殿の首領よ。」

ハイエロファントは、祭壇の西に立ち東を向いて言う。

H t : 「ヘカス ヘカス エステ ベベロイ  
I O S . . . の兄弟姉妹たちよ。われらこの場に神殿を開かん。」

P t : 「水と火の浄化」

H t : 「ハイエレイアよ、神殿を水で浄化せよ。」

ハイエレイアは、盃を祭壇のゴブレットに持ち替え、東から始めて、右回りに四方点で外側に面して、指を塩水に浸して十字を切った後、三角形を描く。終了後、自分の場で宣言する。

H r : 「神殿を水で浄化した。」

H t : 「ダドウコスよ、神殿を火で聖別せよ。」

ダドウコスは、杖を祭壇の香炉に持ち替え、東から始めて、右回りに四方点で外側に面して、薫煙の十字を切った後、三角形を描く。終了後、自分の場で宣言する。

D d : 「神殿を火で聖別した。」

P t : 「四門の開放」

ハイエロファントは、両手を目の前で左右に広げる《ヴェールを開く》合図を行う。

ヘゲモンは、東に面し、魔術剣で「風旗」を指し、次を唱える。

H g : 「EX ARP XFA IO AAI TI RIT OL POLIP」  
(イクス・アール・ペー イクス・ファー イー・オオー アアー・アアー・イー  
ティー リー・テー オオー・レエー ポオー・イー・レー・ペー)

ヘゲモンは、風の召喚の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

H g : 「見よ、渦巻く風を。内奥にありしものは、慈悲と識見もて外側に開かれん。  
われ、風の門を開きたり。」

P t : 「神殿の東に注目されたい。物質の壁のすぐ後ろに、高さ約2メートル、幅約1メートル

の紫色の微光を放つ空間が風の門として開いた。その門の彼方から黄色の光の筋が幾本も差し込み門の中央に黄色い光の球を造る。その輝きがヘゲモン、すなわち空間の君主（貴婦人）を貫き、ヘゲモンの全身は黄色い輝きに包まれる。その様子を心の目で見よ。いまや、風の元素が疾風と化して吹き込んでくる。冷たく激しい風が門をとおり、門の前に刻み込まれた五芒星と六芒星をくぐり抜け、黄色い指を伸ばして門と祭壇をむすびつけ、祭壇に風の霊が凝集する。」

ダドウコスは、南方を向き、杖で「火旗」を指し、次を唱える。

D d : 「BITOM IA IAL T IADP OAD PR MLPRG」  
(ビー・トオー・エエム イイー・アアー イイー・アアー・レエー ター  
イイー・アアー・デエー・ペー オー・アアー・デエー パアール  
エム・レエー・パール・ゲエー)

ダドウコスは、火の召喚の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

D d : 「見よ、逆巻く炎を。主の御手にほむらは戯れ、真実を糧に輝く。  
われ、火の門を開きたり。」

P t : 「神殿の南に注目されたい。物質の壁のすぐ後ろに、高さ約2メートル、幅約1メートル

の緑色の微光を放つ空間が火の門として開いた。その門の彼方から真紅の光の筋が幾本も差し込み門の中央に赤い光の球を造る。その輝きがダドウコス、すなわち炎の君主（貴婦人）を貫き、ダドウコスの全身は赤い輝きに包まれる。その様子を心の目で見よ。いまや、火の元素が炎の固まりと化して差し込んでくる。強烈な熱波が門をとおり、門の前に刻み込まれた五芒星と六芒星をくぐり抜け、真紅の指を伸ばして門と祭壇を結びつけ、祭壇に火の霊が凝集する。」

ハイエレイアは、西方を向き、杯で「水旗」を指し、次を唱える。

H r : 「HKOMA KNILA O IODI M L DO T AAI TA」  
(ハイ・コー・マー ケー・ニー・ラー オオー イイー・オオー・ディー  
エム エル ドオー テエー アアー・アアー・イイー タアー)

ハイエレイアは、水の召喚の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

H r : 「見よ、ざわめく海を。わが真実の名前が漂う、わが内部の血潮よ。  
われ、水の門を開きたり。」

P t : 「神殿の西に注目されたい。物質の壁のすぐ後ろに、高さ約2メートル、幅約1メートル

のオレンジ色の微光を放つ空間が水の門として開いた。その門の彼方から青い光の筋が幾本も差し込み門の中央に青い光の球を造る。その輝きがハイエレイア、すなわち綿津見の君主（貴婦人）を貫き、ハイエレイアの全身は青い輝きに包まれる。その様子を心の目で見よ。

いまや、水の元素が大いなる大海のうねりと化して流れ込んでくる。潮が満ちるときのように冷たく清らかな感触が門をとおり、門の前に刻み込まれた五芒星と六芒星をくぐり抜け、群青の指を伸ばして門と祭壇を結びつけ、祭壇に水の霊が凝集する。」

ストリストリアは、北方を向き、アंकで「地旗」を指し、次を唱える。

S t : 「 N A N T A A N O A N N O N K P T A K A L A N P L A 」  
( エン・アー・エン・ター アー ノー・アー・ネー ノー・エン・ケー・ペー  
ター カー・レー アー・ネエー ペー・ラー )

ストリストリアは、地の召喚の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

S t : 「見よ、不動の大地を。わが思いと情の結び合わさる地よ。  
われ、地の門を開きたり。」

P t : 「神殿の北に注目されたい。物質の壁のすぐ後ろに、高さ約2メートル、幅約1メートル

の黄金色の微光を放つ空間が地の門として開いた。その門の彼方から緑色の光の筋が幾本も差し込み門の中央に緑の光の球を造る。その輝きがストリストリア、すなわち大地の君主(貴婦人)を貫き、地の司官の全身は青い輝きに包まれる。その様子を心の目で見よ。

いまや、地の元素が圧倒的な存在感をもって忍び寄ってくる。大いなる平安と安定の感覚が門をとおり、門の前に刻み込まれた五芒星と六芒星をくぐり抜け、緑の指を伸ばして門と祭壇を結びつけ、祭壇に地の霊が凝集する。」

P t : 「されば祭壇に注目されたい。

東の風の門から、黄色の光が伸び、風を運ぶ。

南の火の門から、赤い光が伸び、火を運ぶ。

西の水の門から、青い光が伸び、水を運ぶ。

北の地の門から、緑の光が伸び、地を運ぶ。

神殿に呼び込まれた四大の霊気は、祭壇を中心に結び合わされ、巨大な十字架を形成した。」

H t : 「四門は開放された。神秘なる周行を光と闇の小径に起こすべし。」

P t : 「竜の周行。

この神秘なる《竜の周行》により、上空から光の渦が、下方から闇の渦が召喚され、祭壇を縦軸として、神殿全体を光と闇の二重螺旋のなかに包み込む。」

ヘゲモンが最初に右回りに動き始める。S、W、ストリストリアが追う。

神殿の東を通過するとき《ホルスのサイン》を円周上になし、ヘゲモンは、1回、ダドウコスは、2回、Wとストリストリアは、3回通過した後、自分の場に戻る。

H t : 「神秘なる周行は完成し、天の竜は降下せり。されば《宇宙の主》を讃えん。」

P t : 「宇宙の主の讃歌。

参列者は全て東を向いてお立ち下さい。

ハイエロファントの言葉と動作に合わせ宇宙の主を礼拝します。」

全員が東を向き、主への讃歌を唱える。

A l l : 「聖なるかな汝、宇宙の主よ! (ホルスのサイン)

聖なるかな汝、自然の造らざる者よ! (継続)

聖なるかな汝、広大にして強大なる者よ! (継続)

光と闇の主よ! (ハーポクラテスのサイン)



### 第3章 秋分の祝祭

H t : 「われら秋分点を祝祭せん。」

P t : 「諸神の召喚」

ハイエロファントは、西に面する。

H t : 「ここに《生まれなき》者を召喚せん」

ハイエロファントは、《竜の十字》を切る。

H t : 「われ汝を召喚す、生まれなき者よ。

汝、地と天を造りし者よ。

汝、昼と夜を造りし者よ。

汝、闇と光を造りし者よ。

汝は、完全者たるわれなり、何人もかって目にせぬ者なり。

汝は、イア ベズ ペー。

汝は、イア アボフラッツ ヨド。

汝は、正と不正を分かちたる。

汝は、女と男を造りたる。

汝は、種と果実を生みたる。

汝は、人を互いに愛しあい、憎みあうべく造りたる。」

H t : 「われはBGD。汝の密儀、すなわち光と闇の魔術を託されし、汝の予言者なり。

汝、湿と乾をあらわし、すべての生命を造り、育み、滅ぼすものなり。

汝、わが声を聞くべし。われは、無垢なる蒼穹の天使なればなり。

こは、汝の預言者につけられし名前なり。」

ヘゲモンは、東を向いて立ち、東の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なネフティス女神の立像を視覚化する。意識の焦点を女神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

H g : 「わが声を聞け、HRV - RA - HA !

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、人の姿を取りし蛇なり。

汝は、宇宙を調停する者なり。

汝は、神殿の支配者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、

陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、

われに服従せしめん。」

ダドウコスは、南を向いて立ち、南の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なセット=テユフオーン神の立像を視覚化する。意識の焦点を神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

D d : 「わが声を聞け、APV - PRSh !

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、否定する霊なり。

汝は、真夜中の天空なり。

汝は、苦き知恵の支配者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、われに服従せしめん。」

ハイエレイアは、西を向いて立ち、西の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なイシス女神の立像を視覚化する。意識の焦点を女神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

H r : 「わが声を聞け、A S T h - R N N V T h !

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、宇宙の母なり。

汝は、全き闇なり。

汝は、魔術の支配者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、われに服従せしめん。」

ストリストリアは、北を向いて立ち、北の神殿の壁の彼方に聳え立つ巨大なオシリス神の立像を視覚化する。意識の焦点を神の目に向け、精神で神のオーラに接触する。

S t : 「わが声を聞け、A S R - V N - N P R !

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、死して再び甦りし者なり。

汝は、大地を肥沃にする者なり。

汝は、黄泉の支配者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、われに服従せしめん。」

ハイエロファントは、祭壇の東から西に面して両手を広げ祭壇に主神を召喚する。

H t : 「われ、汝を召喚す、生まれなき者よ！

汝、恐るべき不可視の神よ。

汝、霊の虚の場所に住まう者よ。

汝は、V R - H R V、古き天帝なり。

汝は、R A - H R V - K T H I、真昼の太陽なり。

汝は、H R V - P A - K R A T h、無垢なる幼子なり。

汝は、生まれなき者にして、宇宙の守護者なり。

わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、われに服従せしめん。」

H r : 「これは神々の主なり。

これは宇宙の主なり。

これは風の恐れる者なり。

これはその命により声を造りし、万物と無の支配者なり。」

H t : 「わが声を聞け、そしてすべての霊をわれに従わしめよ。

されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、

陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、  
われに服従せしめん。」

H g : 「われは汝のもとに行かず、汝がわがもとに来たれり。  
星と、夜と、稲妻の彩る空間に、  
汝がいずこをさまようとも、常にわがもとに帰り来たり。  
われは天の空虚に住まえり。  
汝がこの座所を訪れしとき、汝はまさに知る。  
炎と煙の柱をとおして、汝は上り、また下りぬ。  
不死鳥のごとく、翼は焼かれ、また蘇る。  
そは汝の真実の名なり。」

H t : 「われはかれなり、生まれなき者なり。足元に目をもつ者なり。  
強大にして不滅の火なり。  
われはかれなり、真実なり。  
われはかれなり、世界に悪のはびこるを厭う者なり。  
われはかれなり、稲妻を発し、雷鳴を轟かす。  
われはかれなり、地に生命の雨を降らしたり。  
われはかれなり、口より火を発する者なり。  
われはかれなり、子を造り、光へと顕現する者なり。  
われはかれなり、世界の恩寵なり。  
蛇をまといし心臓こそ、わが名前なり。  
汝、来たりてわれに従い、すべての霊をわれに服従せしめよ。  
されば、すべての蒼穹の霊、エーテルの霊、地の上の霊、地の下の霊、  
陸の霊、海の霊、渦巻く風の霊、逆巻く炎の霊、神のあらゆる呪詛と懲罰を、  
われに服従せしめん。イアオ、サバオ。かくのごとき言葉なり。」

P t : 「内なる神殿に《三重に偉大なる神》は降臨せり。  
秋分は到来せり、宇宙の主を讃えん。」

H g : 「宇宙の主を讃えん。  
聖なるかな、汝、風の主よ。  
蒼穹を創りしものよ、来たりて秋分を祝せよ。」

D d : 「宇宙の主を讃えん。  
聖なるかな、汝、火の主よ。  
栄光の座を示すものよ、来たりて秋分を祝せよ。」

H r : 「宇宙の主を讃えん。  
聖なるかな、汝、水の主よ。  
創造のとき深淵の面を歩きしものよ、来たりて秋分を祝せよ。」

S t : 「宇宙の主を讃えん。  
聖なるかな、汝、地の主よ。  
自ら座すべき大地を造りしものよ、来たりて秋分を祝せよ。」

H t : 「宇宙の主を讃えん。  
聖なるかな、汝、万物を生みしものよ。  
新羅万象は、汝のなかにあり、  
わが右手を天に伸ばせば、そこに汝あり、（右手を上）

わが左手を冥府に伸ばせば、そこにも汝あり、(左手を下に)  
わが腕を組めば、そこにも汝あり。(腕を組む)  
汝のものは、躍動する《風》なり。(東面)  
汝のものは、燃える炎の《火》なり。(南面)  
汝のものは、満ち引きする《水》なり。(西面)  
汝のものは、堪え忍び定まる《地》なり。(北面)  
わが心臓の光輪は回転せり、来たりて秋分を祝せよ。(再度、東面)」

D d : 「 I 」 - - - H t : 「 Ipsissimis Isis 」  
S t : 「 A 」 - - - H t : 「 Ad Astra Apophem 」  
H g : 「 O 」 - - - H t : 「 Omnes Omnium Osiridem 」  
H r : 「 I A O ( イ イ イ イ ー ・ ア ア ア ア ー ・ オ オ オ オ ー ) 」

P t : 「 宇宙の主の賛歌は終了せり。聞け、神殿のうからよ。 」

ダドウコスは、祭壇に進み出て、武器で火の上に十字を切る。  
D d : 「 見よ、パンドラの筐は開かれた。 AVE KALON KAKON 」  
ダドウコスは、自分の座に戻る。

ストリストリアは、祭壇に進み出て、武器で塩の皿の上に十字を切る。  
S t : 「 見よ、大いなる母の胎は開かれたり。 AVE NAVIGIUM ISIDIS 」  
ストリストリアは、自分の座に戻る。

ヘゲモンは、祭壇に進み出て、武器で薔薇の上に十字を切る。  
H g : 「 見よ、太陽を纏いし貴婦人が現る。 AVE MULIER AMICTA SOLE 」  
ヘゲモンは、自分の座に戻る。

ハイエレイアは、祭壇に進み出て、武器で杯の上に十字を切る。  
H r : 「 三は四において安定し、四は三において変化する。二分されし円の闇と光は等価なり。  
AVE UMBRA CONSURGENS ET CORPORIS AURORA 」  
ハイエレイアは、自分の座に戻る。

H r : 「 見よ、天の竜は降臨した。昼と夜が交わり、竜の尾が星を撃ちたり。 」

H g : 「 竜を従えし者よ、大いなる女神よ。御身の名を明かしたまえ。 」

H r : 「 われはかつて在りし、いま在り、やがて来るものなり。  
わがヴェールの下を垣間見し者なし。 」

H g : 「 万物は御身を探し求めり。御身の名を明かしたまえ。 」

H r : 「 われは万物の母にして、あらゆる原理の支配者なり。 」

H g : 「 万物は御身を礼拝せん。御身の名をあかしたまえ。 」

H r : 「 わが名は《ヴェールを覆りしイシス》なり。 」

ハイエロファントは、祭壇の東に周り、西を向く。

P t : 「 秋分は来たれり。昼と夜は均衡せり。 」

H t : 「女神に拝礼す。」 ホルスのサイン

H t : 「AVE ISIDES CANDIDO PER TESSERAM MAGNA・・・」  
鈴を6回鳴らす。

H t : 「女神に拝礼す。」 ハーポクラテスのサイン

H t : 「AVE ISIDES NIGRAE PER TESSERAM MAGNA・・・」  
鈴を6回鳴らす。

P t : 「パスワードは交換された。」

H g : 「新たに降臨せる女神よ。御身の名を明かしたまえ。」

H r : 「われは神々のなかで古き者。黄泉の女王なり。」

H g : 「誠に畏敬すべき女神よ。御身の名を明かしたまえ。」

H r : 「われは玄き太母なり。わが胎より出でし者、すべてを呑み尽くさん。」

H g : 「万物は御身の前にひれ伏さん。御身の名を明かしたまえ。」

H r : 「わが名は《悲嘆せるイシス》なり。」

ハイエロファントは、祭壇から離れ、西に行く。

それぞれの方位の壁に面したE、S、Nの三司官は佇立したまま、神殿を囲む魔法円を青白い炎の円環として視角化し、その魔法円に意識と意志を投射して、炎を激しく燃え盛らせ、神殿内部が完全な結界として存在するように強化せよ。(四大の門はそのまま)

ハイエレイアは、炎の魔法円の西端に「水の門」を強く視覚化し、そこから大いなる水のイメージが流れ込む様子を、意識と意志を総動員して誘導せよ。神殿の内部に、重く冷たい水の霊気が満ちていく有り様を感じなさい。

ハイエロファントは、西を向いて跪拝する。

H t : 「大いなる女神の背後に、日輪の最後の残照が消えつつある。」

P t : 「司官を除く参列者は西を向いて目を閉じて下さい。そして、身体の力を抜いてゆっくり

と呼吸して下さい。西の方角に赤い夕日が沈んでいきます。それとともに、周囲は濃い闇に覆われていく。夜空に星はない。月もない。全ての光が消し去られ、人の手になる火もない真の闇があなたを包んでいく。その肉感的な闇の重みを感じなさい。肌に触れる濃密な闇の感触を味わいなさい。

(しばしの沈黙)

あなたは密かな音を聞く。風のような、地鳴りのような、はたまた遠い彼方の雷鳴のような、何者がたてたともつかぬ曖昧で不思議な音が、やわらかに耳朶をうつ。そして、あなたは見えぬはずの目を見開いて、この闇の世界の果てに、大地を取り巻いている巨大で長い胴体をもつ何者かの蠕動を感じとる。その途方もなく巨きく、しなやかな肉の輪は、僅かづつ動いているようだ。不動の大地が、自らを締めつける闇のなかの闇に感応して、人間に捕らえられるか否かの範囲で微動している。不思議な音、あるいは歌声は、この濃い闇のなかで、闇より濃密な何者かの轟く背後から聞こえてくる。

(しばしの沈黙)

あなたは、ゆっくりと前に進んでいきます。スープより濃い闇のなかを、半ば泳ぐようにして、進んでいく。そして、ふと気づくのだ。あなたの周りが巨大な肉の山で囲まれていることを。その肉の山は、大陸の背骨に匹敵する山脈の大きさをもち、しかも生きて呼吸していた。世界を取り巻き、世界の境界を定める竜のように。

(しばしの沈黙)

あなたは目を凝らして闇のなかを見通す。すると目によるのではなく、直接的な知覚によって、海のなかの小さな島に巨大な蛇が椰子の幹を取り巻いて休んでいるのを知るだろう。それは混沌の闇そのものが輪となって受肉した竜である。この虫の王の本生は、今も世界に巻きついて、大地と融合しており、そのごく微細な一部分が、大海の真ん中の島に現れ、椰子の幹をきつく締めつけているのだ。

(しばしの沈黙)

その椰子の木には、甘い香りを放つ固い実はならず、しかし、瑞々しい葉の奥に、穏やかな光沢をもつ小さな真珠が隠されていた。蛇は真珠を守るため、威嚇的な呼吸を吐きながら常に蠢いている。あなたは椰子の木の葉の陰から、真珠の封じられた輝きのなかに、哀しい女性の面影を感じ取る。そして、微かな歌声が漏れてくるのを聞く。何としてもこの蛇を眠らせ、真珠のなかの歌う誰かを開放しなければならない。

次の呪文を繰り返し唱えなさい。

外周を取り巻く闇は、自らの尾をくわえた竜である。闇を呑み、闇に溶けよ。

繰り返しなさい。

外周を取り巻く闇は、自らの尾をくわえた竜である。闇を呑み、闇に溶けよ。

繰り返しなさい。

(しばしの沈黙)

あなたの前で蛇は尾をくわえて眠りはじめた。あなたは蛇の巨大な胴体をまたぎ、椰子の葉の間から真珠を取り出す。濃い闇の底から光が浮上するように、真珠が内部に封印された輝きを放ちはじめた。そのやさしい光は、霧を散らす風のように濃密な闇を吹き払い、淀んだ闇の堆積である蛇も溶かし去った。創造を絶する神秘的な光の柱が、真珠をもつあなたを中心にひろがり、明るく照らし出された上空から無数の羽ばたく白いものが舞い降りてくる。光の柱は、急速に闇を押し戻していく。闇が四方に追いやられたあとには、青空が広がり、小さな島は明るさを回復した熱帯の海のぎらぎらとした照り返しに囲まれた。濃い雲に見まがう闇の輪は水平線の近くまで駆逐され、真昼の日差しに

照らされた島の上空に、<sup>メタトロン</sup>羽の王に指揮された天使の合唱団が、妙なる主の讃歌を響かせながら降臨してくる。

(しばしの沈黙)

あなたの手のなかで、真珠は水滴に姿を変え、掌の熱を感じたように、一握りの蒸気となって天に登りはじめた。天使たちは、真珠の昇天を出迎えるように布陣し、白い翼を羽ばたかせる。水蒸気は、神気に変容し、あなたの見守るなか、臆気な裸体の女神の姿をとる。それは大いなる女神のなかの女神、イシスの眩い肉体と白い尊顔であった。西の空半分を占める無数の天使を背後に従え、その優美な足指は海面に触れ、やさしい曲線美の脚を見上げると、豊かな腰は白い雲の衣に隠れ、遥か上空の美しい釣り鐘状の胸乳のさらに彼方に、日輪を冠とした女神の横顔が仰ぎ見えた。

(しばしの沈黙)

あなたが女神を仰ぎ見たのは、ほんの束の間のことで、水蒸気に映る陽炎のように女神の姿は溶けて消えた。そして、水平線の彼方まで退いた闇が、再び忍びよりはじめる。天使の大集団も、翼の渦を巻くように舞い踊りながら天に戻っていく。

しかし、今度は世界の半分を闇の下に納めたところで、その浸食は止まった。

世界の光と闇の均衡は、再び保たれた。闇のなかに光があるように、光のなかにも闇がある。真珠のなかに隠れていた輝きが女神イシスの《光》ならば、地上を這う濃い雲も女神イシスの《闇》なのだ。あなたは光に焦がれるだけでなく、闇をも友としなくては

ならぬ。真珠を守る蛇の島は徐々に遠ざかった。あなたは闇と光がほどよく溶け合った黄昏のなかを通過しながら、夜を呼吸している。その穏やかな冷たさを味わい。老成のもたらす夜の知恵を聞きながら、あなたの肉体が真昼の活動から夕べの思慮にと調律されていくのを感じなさい。また、刈り取るときから、次の収穫のために思いめぐらすときに変化したことを。

(しばしの沈黙・・・)

静かに目を開けて下さい。イメージの旅は終わりました。」

H t : 「真珠の歌が終わり、銀がもたらされた。」

ハイエロファントは、説法を行う。

(秋分の意味：タットワの潮が、《収穫の潮》から《計画の潮》に切り替わる。

マクロプロソポスの槍とミクロプロソポスの剣、血を受ける盃等々)

P t : 「秋分点は通過せり。・・・聖餐をともにせん。」

(注：特別な儀式を行う場合は、この部分で行う。繋ぎ方は以下のとおり。

Pの「秋分点は通過せり。・・・をせんがため、・・・の儀式が執り行われる。」

・・・《儀式実施》・・・

Pの「・・・儀式は、終了せり、聖餐をともにせん。」)

ハイエロファントは、祭壇の西に立ち、赤灯に手をかざす。

H t : 「ヨド NEQUAQVAM VACVVM」

ハイエロファントは、杯のワインを飲む。

H t : 「ヘー LIVERTAS EVANGELII」

ハイエロファントは、薔薇を取り上げ香を嗅ぐ。

H t : 「ヴァウ DEI GLORIA INTACTA」

ハイエロファントは、パンに塩をまぶして食う。

H t : 「ヘー REGIS JUGUM」

ハイエロファントは、再度、薔薇を取り上げて言う。

H t : 「ヘゲモンよ。われ汝を招く。

われとともにこの薔薇の香を《風》の象徴として嗅ぐべし。」

ヘゲモンは、祭壇の東に立ち薔薇の香を嗅ぐ。次にハイエロファントは、Eの手を取り赤灯に手をかざさせる。

H t : 「われとともに、この神聖なる《火》の温かさを感じるべし。」

ハイエロファントは、パンを塩にまぶして与え、

H t : 「われとともに《地》の象徴として、このパンと塩を食すべし」

ハイエロファントは、盃を取って与え、

H t : 「されば最後に、元素の《水》の聖別されし紋章として、

われとともにこの葡萄酒を飲むべし」

ヘゲモンは、退き、ハイエロファントは、祭壇の東に回り、南に面する。ダドウコスが進み出る。以後、同じプロセスでWとストリストリアに四大の象徴たる聖餐を与え、その後に儀典司官は、参列者を進ませる。

全員が聖餐を受け終わったら、Pが進み出て最後に食す。ハイエロファントは、祭壇の東から宣言する。

H t : 「われらが食せしものにより、われらに光を分かち与えたまえ。  
宇宙の主を讃えん。」

A l l : 「聖なるかな、汝、宇宙の主よ！ (ホルスのサイン)  
聖なるかな、汝、自然の造らざる者よ！ (継続)  
聖なるかな、汝、広大にして強大なる者よ！ (継続)  
光と闇の主よ！」 (ハーポクラテスのサイン)

#### 第4章 閉式

H t : 「I O S . . . の兄弟姉妹たちよ。神殿を閉じるわれを助けよ」

P t : 「水と火の浄化」

H t : 「ハイエレイアよ、神殿を水で浄化せよ。」

ハイエレイアは、閉式と同じ動作をする。

H r : 「神殿を水で浄化した。」

H t : 「ダドウコスよ、神殿を火で聖別せよ。」

ダドウコスは、閉式と同じ動作をする。

D d : 「神殿を火で聖別した。」

P t : 「諸神への賛辞。」

H t : 「宇宙を領したまう《三重に偉大なる神》に感謝せん。  
輝ける鷲、R A - H R V - K T H I よ、時空の彼方に戻りたまえ。」

S t : 「黄泉を領したまう《死して再び蘇る神》に感謝せん。  
大地の領主、A S R - V N - N P R よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。」

H r : 「魔術を制したまう《黒き女神》に感謝せん。  
海の貴夫人、A S T h - R N N V T h よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。」

D d : 「苦き知恵を制したまう《灼熱の試練を下す神》に感謝せん。  
虚空の領主、A P V - P R S h よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。」

H g : 「神殿を領したまう《白き女神》に感謝せん。  
涼風の貴夫人、H R V - R A - H A よ、霊の虚の場所に戻りたまえ。」

H t : 「神秘なる逆周行を光の小径に起こすべし。」

P t : 「竜の逆周行。  
この神秘なる《竜の逆周行》により、祭壇を軸として上下に絡み合った光と闇の二重螺旋が分離し、光の渦は上方に、闇の渦は下方に去って行く。」

ヘゲモンが最初に左回りに動き始める。N、W、ダドウコスが追う。  
神殿の東を通過するとき《ホルスのサイン》を円周上になし、ヘゲモンは、1回、ストリ  
ストリアは、2回、Wとダドウコスは、3回通過した後、自分の場に戻る。

H t : 「光の逆周行は完成し、天の竜は上昇せり。されば《宇宙の主》を讃えん。」

P t : 「宇宙の主の讃歌」

全員が東を向き、主への讃歌を唱える。

A l l : 「聖なるかな汝、宇宙の主よ！ (ホルスのサイン)  
聖なるかな汝、自然の造らざる者よ！ (継 続)  
聖なるかな汝、広大にして強大なる者よ！ (継 続)  
光と闇の主よ！ (ハーポクラテスのサイン)」

P t : 「四門の閉鎖」

P t : 「神殿の北に注目されたい。ストリストリアがエノク語の呪文を唱えると同時に、祭壇  
から地の

門に向かい平安と安定の感覚が押し戻されていく。黄金色の門の彼方、地の霊が本来所  
属すべき世界に、緑色の光の筋が幾本も矢のように吸い込まれていくだろう。かれが追  
儼の五芒星と六芒星を描ききった瞬間に、地の門は上下左右から一種に折り畳まれるよ  
うにして、消滅する。

これら全てを心で見よ。」

ストリストリアは、北方を向き、アंकで「地旗」を指し、次を唱える。

S t : 「NANTA A NOAN NONKP TA KAL AN PLA」  
(エン・アー・エン・ター アー ノー・アー・ネー ノー・エン・ケー・ペー  
ター カー・レー アー・ネー ペー・ラー)

ストリストリアは、地の追儼の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

S t : 「見よ、不動の大地を。わが思いと情の結び合わさる地よ。  
われは、地の門を閉じた。」

P t : 「神殿の西に注目されたい。ハイエレイアがエノク語の呪文を唱えると同時に、祭壇か  
ら水の

門に向かい急速に潮が引き始める。オレンジ色の門の彼方、水の霊が本来所属すべき世  
界に、青い光の筋が幾本も矢のように吸い込まれていくだろう。かれが追儼の五芒星と  
六芒星を描ききった瞬間に、水の門は上下左右から一種に折り畳まれるようにして、消  
滅する。

これら全てを心で見よ。」

ハイエレイアは、西方を向き、杯で「水旗」を指し、次を唱える。

H r : 「HKOMA KNILA O IODI M L DO T AAI TA」  
(ハイ・コー・マー ケー・ニー・ラー オオー イイー・オオー・ディー  
エム エル ドオー テー アアー・アアー・イイー タアー)

ハイエレイアは、水の追儼の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

H r : 「見よ、ざわめく海を。わが真実の名前が漂う、わが内部の血潮よ。  
われは、水の門を閉じた。」

P t : 「 神 殿 の 南 に 注 目 さ れ たい 。 ダ ド ウ コ ス が エ ノ ク 語 の 呪 文 を 唱 え る と 同 時 に 、 祭 壇 か ら 火 の

門 に向 か い 熱 と 光 が 反 射 さ れ る 。 緑 色 の 門 の 彼 方 、 火 の 霊 が 本 来 所 属 す べ き 世 界 に 、 赤 い 光 の 筋 が 幾 本 も 矢 の よう に 吸 い 込 ま れ て い く だ ろ う 。 か れ が 追 讎 の 五 芒 星 と 六 芒 星 を 描 き き っ た 瞬 間 に 、 火 の 門 は 上 下 左 右 か ら 一 種 に 折 り 畳 ま れ る よう に し て 、 消 滅 す る 。 こ れ ら 全 て を 心 の 目 で 見 よ 。 」

ダドウコスは、南方を向き、杖で「火旗」を指し、次を唱える。

D d : 「 B I T O M I A I A L T I A D P O A D P R M L P R G 」  
( ビー・トォー・エエム イー・アァー イー・アァー・レー ター  
イー・アァー・デー・ペー オー・アァー・デー パァール  
エム・レー・パァール・ゲー )

ダドウコスは、火の追讎の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

D d : 「 見 よ 、 逆 巻 く 炎 を 。 主 の 御 手 に ほ む ら は 戯 れ 、 真 実 を 糧 に 輝 く 。  
われは、火の門を閉じた。 」

P t : 「 神 殿 の 東 に 注 目 さ れ たい 。 ヘ ゲ モ ン が エ ノ ク 語 の 呪 文 を 唱 え る と 同 時 に 、 祭 壇 か ら 風 の

門 に向 か い 激 し い 風 が 吹 き 戻 す 。 紫 色 の 門 の 彼 方 、 風 の 霊 が 本 来 所 属 す べ き 世 界 に 、 黄 色 い 光 の 筋 が 幾 本 も 矢 の よう に 吸 い 込 ま れ て い く だ ろ う 。 か れ が 追 讎 の 五 芒 星 と 六 芒 星 を 描 き き っ た 瞬 間 に 、 風 の 門 は 上 下 左 右 か ら 一 種 に 折 り 畳 ま れ る よう に し て 、 消 滅 す る 。 こ れ ら 全 て を 心 の 目 で 見 よ 。 」

ヘゲモンは、東に面し、短剣で「風旗」を指し、次を唱える。

H g : 「 E X A R P X F A I O A A I T I R I T O L P O L I P 」  
( イクス・アール・ペー イクス・ファー イー・オォー アァー・アァー・イー  
ティー リー・テー オォー・レー ポォー・イー・レー・ペー )

ヘゲモンは、風の追讎の五芒星及び六芒星を描き、次を唱える。

H g : 「 見 よ 、 渦 巻 く 風 を 。 内 奥 に あ り し も の は 、 慈 悲 と 識 見 も て 外 側 に 開 か れ ん 。  
われは、風の門を閉じた。 」

ハイエロファントは、両手を目の前で左右から合わせる〈ヴェールを閉じる〉合図を行う。

H t : 「 四 門 は 閉 鎖 せ り 。

I H S h V H と I H V S h H の 御 名 に お い て 、  
こ の 儀 式 に 捕 ら わ れ し す べ て の 霊 を 解 放 せ ん 。 」

H t : 「 神 殿 作 業 は 終 了 せ り 。 神 殿 は 閉 場 し た 」

P t : 「 参 加 者 退 出 」

参加者はヘゲモンを先頭に左回りに退出する。Pが最後尾につく。Mを残して全て退出した後、ハイエロファントは、小五芒星及び小六芒星の追讎儀式を行い神殿の魔術的磁気作用を中立化する。

その後も星幽的影響力が残存するのを認めた場合は所要の大儀礼で追讎する。

VERBORUM PUBLICA  
I O S  
RITUALE DE  
AEQUINOCTIO AUTUMNO

IMPRIMI POTEST: I O S  
NIHIL OBSTAT QUOMINUS IMPRIMATUR  
IMPRIMATUR : M.E.S.A. 5=6  
AUGUSTUS MCMXCIV

秋分儀式

C I O S 1994  
1994年8月20日 I O S 発行

本文書は、複数のまたは個人の会員が、魔術実践の練習のために使用するものであり、I O S の公式儀式手順書ではない。従って、本儀式を公に実施するテンプル、ロッジはその旨を会員に明確に告示する必要がある。しかし、それは同時に本文書を利用した会員の自由な実践活動を妨げるものではない。会員外の使用については、I O S の許可が必要である。本文書の著作権は団に所属する。本文書の内容の一部または全部を、団の文書による許可なく、機械的、電子的、光学的、霊的、その他の手段で複製、引用、転写することを禁じる。